

# スポータイゼーションをめぐるスポーツ界の 社会学的分析

軟式スポーツにおける誕生と発展のダイナミズムを把握する試み

三谷 舜

本稿では、「スポータイゼーションをめぐるスポーツ界の社会学的分析:軟式スポーツにおける誕生と発展のダイナミズムを把握する試み」をテーマに研究を進めた。研究の背景には、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に追加された「野球・ソフトボール」や「空手」などのスポーツはもちろん、「サーフィン」、「スポーツクライミング」、「スケートボード」などのエクストリームスポーツや、パラリンピックにおける「アダプテッドスポーツ」などが注目されてきているということがある。

研究目的は、現代的なスポーツを捉えるための枠組みを構成し、その枠組みにより軟式ボールを用いたスポーツを分析する。軟式ボールを用いたスポーツは、近代スポーツにルーツを持つスポーツの変化した形態として、つまり現代的なスポーツとして見る点から採用した。

意義としては、現代的なスポーツを分析するにあたって、近代スポーツを分析してきた従来の理論に対して、現代的なスポーツからの視点を含むことにある。それらにかかる議論を行っていくために、以下のように章ごとに検討を進めた。

第1章では、「文明化と近代スポーツ:興奮の探求とスポーツの自律性」を題目に、まず、エリ阿斯による「スポータイゼーション」を概観し、それをさらに発展させたマグワイヤの「グローバル・スポータイゼーション」までの議論の流れを見た。次に、エリアスの議論を参照する際に鍵となる「興奮の探求」を軸に、狐狩りを例として暴力の抑制を検討した。エリアスの言う暴力の抑制は、国家における暴力の独占、つまり警察や軍隊の設置により暴力行為を大衆から取り上げることを「文明化の噴流」として見る点にある。このことから、スポーツにおけるルールの制定も、ルールによる暴力の制限としてみる点ができる。次に、エリアスのテーゼである「相互作用」及び「生存単位」とハーグリーブスの「スポーツの自律性」を結着した。その際には、グットマンの「近代スポーツ

7つの指標」に近代スポーツの性質を見だし、そこでの議論を生存単位とスポーツの自律性から説明をすることで、エリアスとハーグリーブスの連関を議論した。

第2章では、「エリアスとブルデューの『対話』:スポーツの正当性をめぐる闘争としてのスポーツタイゼーション」を題目に、まずブルデュー社会学における概念を概観した。ここではブルデュー社会学でポピュラーな「ハビトゥス」、「界」、「資本」の3つを整理した。次に、ブルデュー社会学におけるスポーツの位置を見た。ここでは、ブルデューがスポーツをどのように捉えていたのか、ブルデュー派の社会学者が行ったスポーツ研究の状況がどのようなものなのか、という2つの点を整理した。次に、エリアスとブルデューを連関させることを試みた。ここでは、「文明化とハビトゥスの形成」と「相互作用と界」の2つの連関を図るために、ブルデュー社会学のフレームをエリアス社会学から説明するという形をとって「対話」とし、試論を展開した。

第3章では、「現代スポーツのスポーツタイゼーション的分析:軟式スポーツを例に」を題目に、ここまでにおいて構築した理論フレームを用いた具体的分析を行った。そのために、軟式ボールを用いたスポーツを「軟式スポーツ」と定義づけ、軟式ボールの歴史と競技人口などの現状を整理し、それらを界の概念及びスポーツタイゼーション的に分析した。そこから、軟式スポーツに元来付与されていた「安全」、「廉価」、「大量生産可能」といった使命は既に達成されたが、今なお大衆に根ざしている理由に、興奮の探求としての機能や、界における正当性をめぐる闘争が繰り広げられる「アリーナ」として機能しているということが導かれた。

おわりに、菊(2010)が述べる、「真の暴力発揮の飛び地」として、スポーツにおける興奮の探求が機能することが、正当性をめぐる闘争のアリーナとしてスポーツが捉えられるということを今回の分析を総合して述べた。本研究において不十分であった点は、分析フレームに階級や権力の観点が明確に打ち出せていない点および、軟式スポーツ分析においてジェンダーの視点からの検討を十分に行えなかった点が挙げられる。今後、従来の近代スポーツやアダプテッドスポーツ、エクストリームスポーツにもそういった捉え直しの波が来ることを期待するとともに、今後の研究の展望としたい。